一般社団法人　大学英語教育学会（JACET）

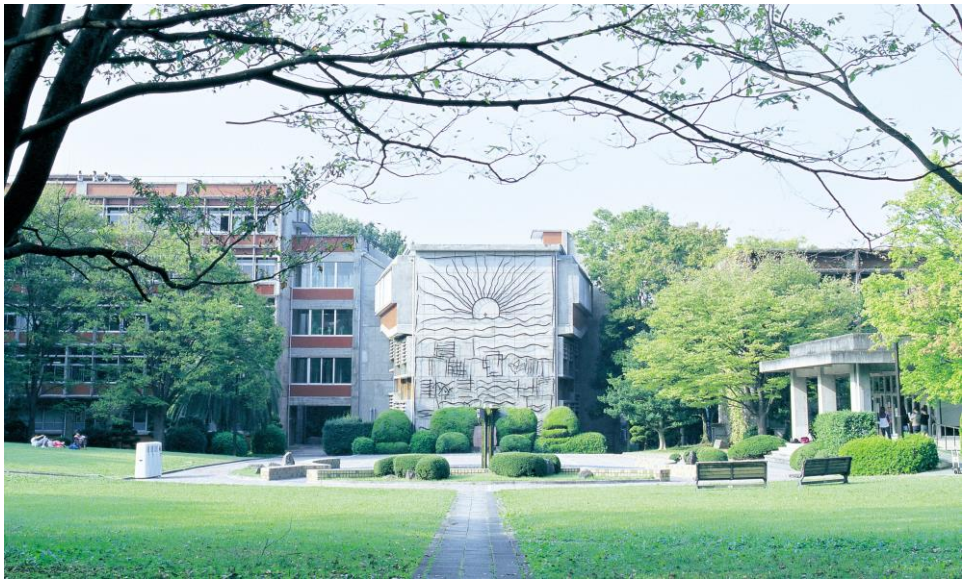
第 31 回（2015 年度）中部支部大会プログラム

The JACET 31st (2015) Chubu-chapter Annual Convention

大会テーマ

豊かなコミュニケーション力を育む『ことば』の力

Exploiting Potentialities of '*langage*' in order to Enhance Profound Communication



2015 年 6 月 20 日（土）

開会時間：午前 10 時

南山大学名古屋キャンパス

〒466-8673　名古屋市昭和区山里町 18

一般社団法人　大学英語教育学会（JACET）

第 31 回（2015 年度）中部支部大会

豊かなコミュニケーション力を育む『ことば』の力

一般社団法人大学英語教育学会（JACET）第 31 回（2015 年）中部支部大会

●日　時:　2015 年 6 月 20 日（土）10:00-17:00
●会　場:　南山大学（名古屋キャンパス）
〒466-8673　名古屋市昭和区山里町 18　電話:052-832-3111（代）
●受　付:　9:30～　フラッテンホール前
●大会本部:　R 棟1階会議室
●会員休憩室:　R 棟1階ホワイエ・R31（R 棟　3 階）

●プログラム

10:00-10:15　開会行事　フラッテンホール（R 棟 1 階）
支部長挨拶　大森裕實（愛知県立大学）
会場校代表挨拶　真野倫平（南山大学外国語学部長）

10:20-12:00　研究発表　R 棟　3 階
（第 1 室[R32 教室], 第 2 室[R33 教室]）

12:00-13:10　昼食休憩
12:20-12:50　中部支部役員会　R 棟会議室

13:10-13:30　支部総会　フラッテンホール（R 棟 1 階）
13:30-15:00　特別講演　同上
15:20-16:50　シンポジウム　同上
16:50-17:00　閉会の辞　同上

17:15-　懇 親 会　教職員食堂

後援　愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会

研究発表　１０：２０－１２：００

第１室（R 棟 3 階 R32 教室）

10:20-10:50
司会　村田泰美（名城大学）
Focusing on Oral and Grammar Skills for TOEIC® (p.4)

Kayoko Nakagawa
Marie Daito
Shota Hayashi
（Kanazawa Institute of Technology）

10:55-11:25
司会　石川有香（名古屋工業大学）
「豊かなコミュニケーション力」として活用できる基礎力とは何かー英語の幹「リズム」「語順」を学ぶ授業をー (p.4)

山田昇司（朝日大学）

11:30-12:00
司会　大石晴美（岐阜聖徳学園大学）
Student Response to Singing in Speaking Classes (p.4)

Yukiko Yamami
（Nagoya University of Foreign Studies/Part-time）

第２室（R 棟 3 階 R33 教室）

10:20-10:50
司会　倉橋洋子（東海学園大学）
Using Texts as Portholes for Topic Exploration (p.4)

Mark Rebuck
（Meijo University）

10:55-11:25
司会　小宮富子（岡崎女子大学）
グループ活動を英語で行うための指導ー実践報告と今後の課題ー(p.5)

加藤和美（東海大学）

11:30-12:00
司会　佐藤雄大（名古屋外国語大学）
学習者の自伝(learner's autobiography)に対する分析ーヴィゴツキーの概念発達の観点からー(p.5)

森　明智（名古屋外国語大学）

支部総会　１３：１０－１３：３０　　フラッテンホール（R 棟 1 階）

特別講演　１３：３０－１５：００　　フラッテンホール（R 棟 1 階）

司会　木村友保（名古屋外国語大学）

「行動派の回想と展望－東大グローバルコミュニケーション研究センター設立の裏側」(p.5)
高田康成（名古屋外国語大学教授・東京大学名誉教授）

休　憩　　１５：００－１５：２０

シンポジウム　１５：２０－１６：５０ フラッテンホール（R 棟 1 階）

「社会が求める英語力と大学で涵養する英語力のインターフェイス」(p.6)

司会　大森裕實（愛知県立大学）

Ⅰ. Register / Style を意識した Usage-based Grammar for Advanced Learners
大森裕實（愛知県立大学教授）

Ⅱ. 論理と感情（Logic and Emotion）
袖川裕美（プロ会議通訳者）

Ⅲ. 講義としての「翻訳」の勧め
池田年穂（慶應義塾大学名誉教授）

Ⅳ. “Awareness” の三本柱――会話の文法、イディオム、および発音力
豊田昌倫（京都大学名誉教授）

閉会の辞　１６：５０－１７：００　　フラッテンホール（R 棟 1 階）

副支部長挨拶　鈴木達也（南山大学）

懇親会　１７：１５－　　教職員食堂

司会　塩澤　正（中部大学）

発表要旨

第１室（R 棟 3 階 R32 教室）

Focusing on Oral and Grammar Skills for TOEIC®

Kayoko Nakagawa, Marie Daito, Shota Hayashi
（Kanazawa Institute of Technology）

Nowadays, many companies use the TOEIC® test to hire and/or promote employees. In response, many colleges offer TOEIC® preparation courses to help students score higher on the test. This study investigated how a TOEIC® course focusing on improving students' pronunciation and grammar skills contributed to increased TOEIC® test scores. In a study of 63 Japanese EFL college students, pre- and post-test scores were analyzed. The results indicated statistically significant gain on post-test scores. Comments collected at the final session revealed that participants were generally satisfied with the course.

「豊かなコミュニケーション力」として活用できる基礎力とは何かー英語の幹「リズム」「語順」を学ぶ授業をー

山田昇司（朝日大学）

本発表は共通教育での実践報告である。英語に対して苦手意識を持つ学生が多いが、そのような学生であっても、彼らの知的レベルにふさわしい内容の教材を選び英語の幹である「リズム」や「語順」に絞り込んで教えていくと、学生は次第に学習意欲を回復し「90 分があっとゆーまで楽しい授業でした」という声も出てくる。それではいったい、どんな英文を与えてどんな形態のプリントを作っているのか、またそれを使う授業はどう設計しどんな評価のしくみを採用しているのか—その実践的技術とそれを支える教育理念を紹介する。

Student Response to Singing in Speaking Classes

Yukiko Yamami
（Nagoya University of Foreign Studies/Part-time）

Singing songs is not only enjoyable but also useful to acquire a second language. Learning an L2 through musical activities increases learners' confidence in speaking (Ludke, 2014). This paper examines whether singing songs in university speaking classes increases willingness to communicate and motivation to speak English. 30 students were given a questionnaire regarding whether singing weekly motives them to attend classes and speak English more. 75% of students reported that singing motivated them to study English more. 71% were further motivated to attend the speaking class. 54% noticed changes in speaking English, such as gaining confidence in pronunciation.

第２室（R 棟 3 階 R33 室）

Using Texts as Portholes for Topic Exploration

Mark Rebuck（Meijo University）

With text-based teaching, it is all too easy to regard the text as a destination, something just to "go through". While intensive reading and translation of texts can serve a purpose, written texts should, the presenter will argue, be used for much more than this. This presentation will show how authentic resources, including YouTube videos and radio clips, can be used to develop and explore topics raised in the text. Using texts as a springboard to deepen content understanding is particularly important in ESP contexts, and the examples in this presentation are from the field of medical English.

グループ活動を英語で行うための指導－実践報告と今後の課題－

加藤和美（東海大学）

本研究者は、第二言語習得の概念と語用論的能力の指導方法をもとにグループ活動のための iPad 教材を開発している。2014 年に authentic な教材を作成するため渡英し、日本人英語学習者が行っているタスクと同じタスクをイギリスの大学生を対象に行った。そしてその様子の録画データを利用して、日本人英語学習者のためのグループ活動の動画教材を作成した。本教材と指導方法の特徴は、1.学習者が「言いたくても言えない英語表現」を集める活動があること、2.学習者はグループで iPad を使って繰り返しモデル動画を分析し、さらに実践とフィードバックを繰り返す活動が含まれていることである。実際に2つの大学で行った授業の様子とその効果を報告する。

学習者の自伝(**learner's autobiography**)に対する分析－ヴィゴツキーの概念発達の観点から－

森　明智（名古屋外国語大学）

本研究は英語学習者が語る学習履歴(autobiography)を coding software(EH Coder)を使って分析し、頻出語や共起語に着目しながら英語学習者の成長の説明を試みている。日本の大学 1 年生を対象にインタビュー形式により彼らの中学から高校を経て大学入学までの英語学習の内容を語ってもらい、特に英語学習の初期から段階が上がっていくに従って「難しい」「分からない」と言った頻出語が出る時期や状況に注目しながら、学習者がそれらの問題を解釈し解決を図る中で、問題解決に至る学習行動を随意的に行えるに至るプロセスをヴィゴツキーの概念発達の観点を用いて仮説的な説明を行う。

＜特別講演＞　フラッテンホール（R 棟 1 階）

行動派の回想と展望－東大グローバルコミュニケーション研究センター設立の裏側

高田康成（名古屋外国語大学教授・東京大学名誉教授）

2000 年を迎えたころから、それまで務めて敬遠してきた英語教育の分野に係りをもつところとなりました。東大駒場で英語教育の責任を担う「英語部会」の主任に選ばれてしまったからです。その後も文科省の主導した悪名高い「英語が使える日本人」計画の委員となり、意に反していよいよ英語教育の問題に深入りせざるをえませんでした。結果的には本務校で各種のプログラムを立ち上げ、挙句の果てには「センター」設立に至ったわけですが、その過程における原理原則はつねに「現状認識」に基づく「概算要求」の作成と貫徹にありました。巷では英語教育論が百家争鳴、それも結構ですが、そろそろ現実的行動主義はいかがでしょうか。

講師紹介

高田康成（たかだ　やすなり）

国際基督教大学卒業、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。大阪大学言語文化部講師、東北大学文学部助教授、東京大学大学院総合文化研究科教授及び東京大学附属グローバルコミュニケーション研究センター創設センター長を経て、2015 年 4 月に名古屋外国語大学現代国際学部現代英語学科学科長に着任。British Council Scholar(1978-80)ケンブリッジ大学エマニュエル学寮; Fulbright Fellow(1985-6)イェール大学;フィレンツェ大学客員研究員(1986-7);DAAD Fellow(2003)ライプツィッヒ大学。専攻は表象古典文化論。

主な編著書：『キケロ　ヨーロッパの知的伝統』（岩波書店、1999）、*Transcendental Descent: Essays in Literature and Philosophy* (University of Tokyo Center for Philosophy, 2006)、『クリティカル・モーメント　批評の根源と臨界の認識』（名古屋大学出版会、2010）。共著として *Platonism and the English Imagination* (Cambridge University Press, 1994)、『シェイクスピアへの架け橋』（東京大学出版会、1998）、『イギリス文学』（放送大学、2003 年）、*The Classics and National Cultures* (Oxford University Press, 2010)など多数。

＜シンポジウム＞　フラッテンホール（R 棟 1 階）

社会が求める英語力と大学で涵養する英語力のインターフェイス

最近の大学教育においては、グローバル化時代の高等教育の在り方が問われ、学士力の向上に関連する教養教育の充実が焦眉の課題となっている。しかも、グローバル人材育成と教養教育充実の両面に深く関わるものが、外国語能力（現実的には、英語力である蓋然性が高い）の涵養ということになる。その外国語能力とは、社会で求められる外国語能力と同義であろうか。

現在の標準的な大学・学部で行なわれている英語教育の問題点の一つは、中等教育（高校）と大差のないレベルのもの、すなわち、レジスターで言えば、teenager の英語表現の習得に留まっており、それは「大学卒業後に使える英語にはなってはいない＝大人の英語を学習していない」ということではないだろうか。そうした側面を NHK「しごとの基礎英語」（2013 年度下半期～）はうまく描き出しており、興味深い番組である。主人公アキは、大卒で、英語の基本語彙と構造は習得しているが、オフィスで上司や顧客相手に、その場に適した表現、心の伝わる表現がなかなかできない。このような点は、自律的学習者として、みずから経験的に学ぶべきだという意見もあるだろうが、大学教育のどの段階で、どのような視点と方法で学ぶかという面も十分に考察の対象となる。なぜなら、教育機関として、高校が大学に入る学生の英語力に責任を持たねばならないのと同様に、大学は社会に輩出する学生の英語力に責任を持たねばならないからである。

本シンポジウムでは、こうした観点から、実際に英語を専門的に駆使して活躍している方々を招き、自身の経験に基づく話から、大学教育のどの段階で、どのような視点と方法で学んだ英語力や知識が活きるのかについて、示唆的言辞を引き出せればと思います。その新たな見解が大学英語教育の改善につながるに違いありません。今回も、パネリストとフロアとに一体感のある、真剣な討論が期待されます。

Ⅰ. Register / Style を意識した Usage-based Grammar for Advanced Learners

大森裕實（愛知県立大学）

Lecch & Svartvik 著 *A Communicative Grammar of English* 第 1 版には Varieties of English の一例として、①When his dad died, Pete had to get another job. (informal/ colloquial)；②After his Father's death, Peter had to change his job. (neutral/ **common core**)；③On the decease of his father, Mr. Brown was obliged to seek alternative employ-ment. (formal/ written) が提示され、ESL/EFL を学習している者にとっては、発話レベルに応じた英語表現が学べるように工夫されており、現 Routledge 版 (2013[3]) においても、いっそうの発展記述を看取することができる。こうした言語使用域を意識した英語表現学習こそ、社会での使用に堪える大人の英語の基礎を涵養するものではないだろうか。中学英語で学んだ Why～?に対する Because ....応答（従属節単独使用）が、書きことば文でも同様に可能だと思う大学生も、その誤用に苦悩する教師の数も、随分と減ることになるだろう。

Ⅱ. 論理と感情（Logic and Emotion）

袖川裕美（プロ会議通訳者）

通訳者としての経験から、よく伝わるコミュニケーションとは、日本語でも英語でも、論理が明快で、感情とのバランスが取れていることだと考える。今回の発表では、

1) 日本語と英語の論理の違いを考察する。豊かなコミュニケーション力を身につけるため、大学教育では、個々の学生が興味を持つトピックについて調べて、日本語と英語で発表することを提案する。
2) 言葉に感情が乗るとき、メッセージは伝わる。感情を乗せやすくするためにも、興味あるテーマ設定は重要である。
3) 論理と感情の融合した、日本人の英語のスピーチの理想のひとつとして、山中伸弥氏のスピーチを紹介する。

Ⅲ. 講義としての「翻訳」の勧め

池田年穂（慶應義塾大学名誉教授）

大学英語教育の両輪は、コミュニケーションスキル上達と英文和訳であろう。大学レベルでは日本語文章力の涵養は等閑視されているため、英文和訳がある程度までその役割を担ってきた。英文和訳は英文を「正確に」日本文に置き換えるものとされている。一歩進めた形の「翻訳」を講義に取り入れている大学は、実技指導的な面が強いためか希である。広いジャンルの書籍翻訳を行っている身として、翻訳には次の 5 点が必要と考えている。1)英語力（構文読解力、語彙力）、2)日本語力（語彙力、表現力、「翻訳スキル」）、3)リサーチ力、4) 読書量や教養、5)専門家との人脈。翻訳家養成が主目的でないので 4)、5)は措くが、講義としての「翻訳」は有効であり、学生に知的な刺激も与えられよう。

Ⅳ. “Awareness” の三本柱――会話の文法、イディオム、および発音力

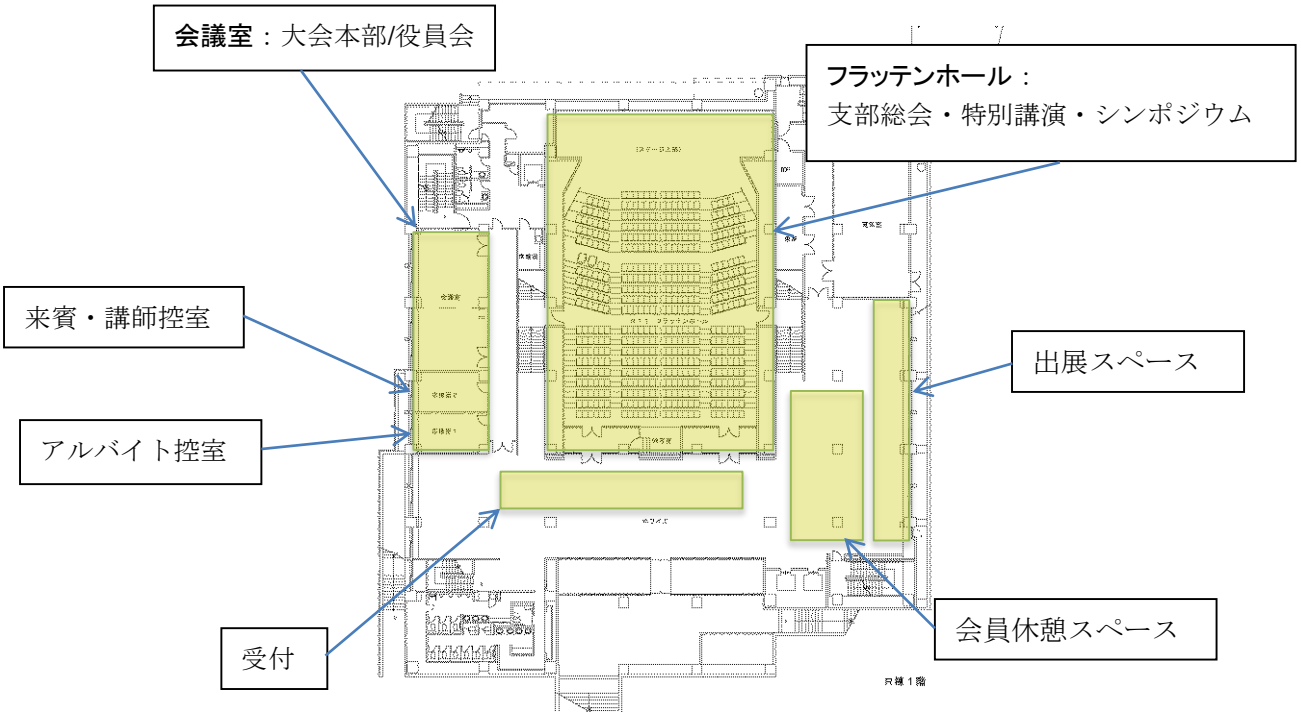
豊田昌倫（京都大学名誉教授）

高等学校までの英語教育の結果、大学生は英語の読解および作文の基礎を固めたとの前提に立って、大学で養う英語力、その「気づき」の三本柱として、会話の文法、イディオムおよび発音力を提案したい。

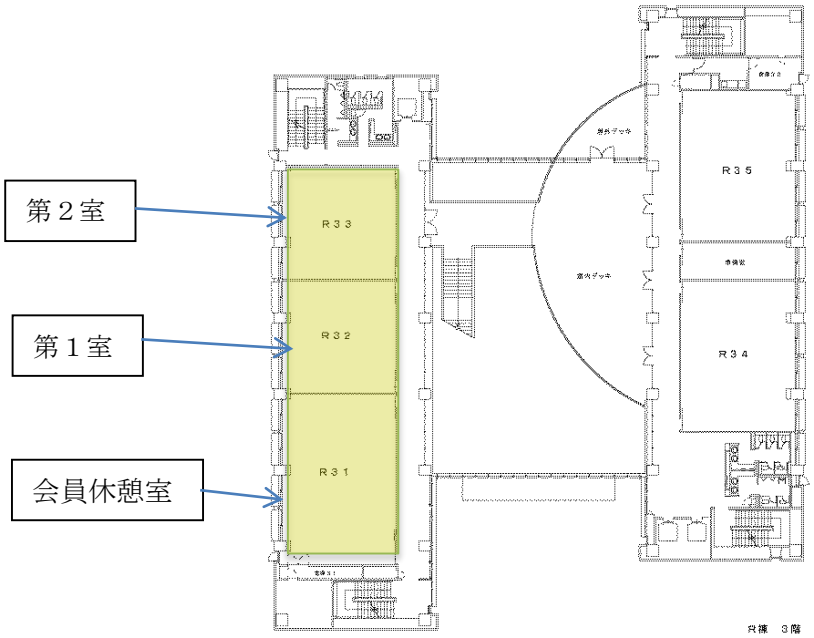
1) 会話の文法。書き言葉の記述・分析を目的とする伝統文法に対して、自然な口語英語の理解と運用に資する「会話の文法」を考える。
2) 習得がもっとも困難とされているイディオムは、英語の音声と意味の関連を考えるとき、学習者の興味をそそり、定型を脱して新しい表現を創造する楽しみやユーモアも味わえる。
3) 文法や語法を実際にコミュニケートする発音力、英語独特の音韻特徴の理解と運用は日本人学生にとって学習上、不可欠の分野である。

● **大会会場　南山大学名古屋キャンパス R 棟**

1 階



３階



● 大会会場　学内　マップ

南山大学名古屋キャンパス

● **懇親会のご案内**

懇親会は事前予約制です（会費 4,500 円）。多くの方々のご参加をお待ちしています。予約は JACET 中部支部のホームページにアクセスしていただき「支部大会」ページにある「懇親会申込」のリンク先でお申し込み下さい。

● **事務局より**

＊ 非会員の参加者は資料代として一人につき 1,000 円の負担をお願いします（なお学生の方は学生証の提示で無料とします）。
＊ 出版社の展示は R 棟1階ホワイエを予定しています。
＊ 各発表会場には Windows PC を用意しますので、持参していただく必要はありません。ただし Mac を持参され使用される場合は VGA アダプタをお持ちください。
＊ レジュメは各自 40 部程度ご用意ください。
＊ 当日、中部支部役員会を12時20分からR棟1階会議室で開催します。役員はご参集ください。
＊ *喫煙場所以外は、キャンパス内禁煙です。*
＊ *会場へのアクセスには公共交通機関をお使い下さい。*
＊ 大会についてのご質問は、中部支部事務局（下記）までメールでお尋ね下さい。

JACET 中部支部紀要編集委員会からのお知らせ

『JACET 中部支部紀要』第 13 号 投稿原稿募集
締切り:2015 年 9 月 10 日（必着）
詳細は、紀要 12 号およびホームページをご覧ください。

問合わせ先: JACET 中部支部事務局

一般社団法人大学英語教育学会（JACET）中部支部事務局
〒470-0197 愛知県日進市岩崎町竹ノ山 57 番地
名古屋外国語大学 佐藤雄大研究室内
t-sato@nufs.ac.jp